

## 諫早干潟　野鳥誌掲載記事（1997年分）

<諫早湾干拓問題-10月の動き>

(No.606 1997年12月号 p.42)

<諫早湾干拓のいま>

(No.604 1997年9/10月号 p.48-49)

<諫早問題 排水門開門を求める署名は期限を9月末まで延長>

(No.603 1997年8月号 p.47)

<潮止めによって注目された諫干（いさかん）事業 山口 雅生>

(No.602 1997年7月号 p.37-38)

<干拓をめぐる7つの疑問>

(No.602 1997年7月号 p.38-39)

<諫早湾干潟を救え>

(No.601 1997年6月号 p.17)

### ● <活動>

諫早湾干拓問題-10月の動き (No.606 1997年12月号 P. 42)

### ●30万人署名を提出

潮受け堤防締め切りから半年の10月14日、水門開放と干拓見直しを求める29万8742人分の署名が、諫早干潟緊急救済本部から首相官邸に提出されました。

当日は本会他の協力で、農水省前など官庁街でアピール行動を行い、専門家による干拓反証の報告会を開催しました。「諫早湾を考える議員の会」総会も開かれ、今後の国会での活動方針について議論されました。

首相、農水大臣からのコメントは残念ながら聞かれませんでしたが、秋から冬の国会での論戦が期待されます。署名にご協力くださったみなさま、どうもありがとうございました。

### ●長崎県支部等、有明海沿岸調査を実施

10月5日、長崎県支部の呼びかけで、湾締切り後2度めの有明海シギ・チドリ類一斉調査が行われました。

同支部によると、調査は沿岸4県各支部の協力で19地点で行われ、全体で30種3092羽を確認。諫早湾では9種863羽と、佐賀県東与賀町大授搦（だいじゅがらみ）に次ぐ種数・個体数を記録しました。前年と比較すると個体数は半減、種数も減っていますが、環境の悪化した湾内に依然として多くの渡り鳥が渡来していることが解りました。

注目されるのは大型シギ類の分布です。諫早湾は全国的に見てもホウロクシギ、ダイシャクシギの渡来数の多い場所ですが、この調査ではこの大型2種が諫早湾と大授搦に集中。諫早湾には他の干潟にない何らかの利点があることを推測させます。

	諫早湾	大授搦	有明海合計
種数	9	26	30
総個体数	863	1431	3092
ダイシャクシギ	57	10	83
ホウロクシギ	54	41	97

1997年10月5日有明海一斉調査の結果

(上げ潮時：長崎県支部まとめ)

鴨川誠長崎県支部長は「越冬期にも引き続き調査を行って、有明海内の鳥の移動や諫早の重要性について解明していきたい」としています。

## ●農水省、鳥類調査実施

農水省は 10 月 29 日、有明海で行った鳥類調査結果の一部を発表しました。

公表されたのは過去 5 年間にカウントされたシギ・チドリ類の有明海周辺 8 区域の総数で、本年 9 月下旬の各区域の個体数分布は、支部調査と同傾向でした。諫早湾の個体数は半減したが、筑後川、荒尾区域は増加しているため、同省は「諫早湾に来ていた野鳥の減った分が、周辺の干潟に移ったと考えられる」としています（朝日新聞報道）。

しかし種名や種毎の個体数は一部しか公表されておらず、前記の大型シギ類の分布に対する疑問などに答える結果となっていません。一時的に他の干潟に難を逃れる種類はあっても、個体数減少という結果は徐々に現れると思われ、半年後の結果だけでは湾締切りの影響が軽いとは結論できないはず。まず干拓事業ありきの 1886 年の環境アセスメント時の態度を、ここでも追認した形になっています。（保護・調査センター）

### ●<活動>

諫早湾干拓のいま（No.604 1997年9月号 P.48-49）

### ●現地情報

7月27日長崎市にて、九州・沖縄ブロック支部代表者による諫早問題対策会議が開かれました。鴨川長崎県支部長より、5月25日に有明海沿岸4支部合同で行われたシギチドリ類分布調査の報告があり、有明海沿岸18か所で観察された総個体数のうち、諫早湾の占める割合が極端に小さく、潮止めの影響を被っていることがうかがわれました。会議では秋以降も同様な調査について協力していくこと、現地見学会等を行って注意を喚起すること等が確認されました。

### ●国会での動き

超党派の国会議員96名で作る「イサハヤを考える議員の会」は、8月までに4回の公開勉強会を行い、農水省、環境庁、建設省他の担当者から事業に関する多くの疑問点を引き出しました。また6月の通常国会会期末に衆議院宛の質問主意書が出され、政府からの回答を元に更なる議論が行われています。論戦は秋の臨時国会へと続いていく見込みです。

地元でも、諫早干拓緊急救済本部が県に対し質問状を提出、公開説明会を要請しています。保護・調査センターではこうした動きを今後もサポートして行きます。

### ●署名締め切り迫る！

8月号封入の署名に多くの方のご協力をいただきありがとうございます。保護・調査センター受付分は、8月26日現在で10,455人分に達します。この署名は諫早干拓緊急救済本部に集約し、国民の声の集成として、潮受け堤防締め切り半年を期して首相宛に提出いたします。お手元にある署名は、どうぞ9月末日までに保護・調査センターまでお送りください。（保護・調査センター）

● <活動>

諫早問題 排水門開門を求める署名は期限を9月末まで延長

(No.603 1997年8月号 P. 47)

本号付録として、諫早湾に潮を通して干潟をよみがえらせるための要望署名を同封いたしました。ご賛同いただける方はご自身の署名と共に、お知り合いの方の署名を集めてお送りください。(たくさん集めていただける方は、なるべくあらかじめ用紙をコピーしてお使いくださいと幸いです。用紙が足りない場合は保護・調査センターまでご請求ください。)

現在までに全国で集まった署名は8万人分。10月初旬の提出までに、なるべく多くの方の署名をいただきたいと思います。署名は9月末日までに、保護・調査センターあてにお送りください。みなさまのご協力を願いいたします。(保護・調査センター)

## ● <活動>

潮止めによって注目された諫干（いさかん）事業

山口 雅生

(No.602 1997年7月号 P. 37-38)

## ●長崎県支部の取り組み

長崎県支部は、諫早湾干拓事業が予算化された後の1985年に結成され、以後、1987年から91年までに年20回前後のシギ・チドリのカウント（36種確認）、他団体と協力しての署名活動、意見書提出、シンポジウムの開催等を行ってきた。その後干潟を守る運動は一時停滞していたが、1年前より再び活発になり、カウントを再開して新たに4種を追加確認、また「諫早湾自然の権利訴訟（ムツゴロウ裁判）」では執行（しきょう）事務局長が、ズグロカモメの代弁者として原告団に参加している。

## ●潮止め後の干潟

4月14日、潮止めの鋼板が落とされてから、干潟の状況は1日1日と変わっている。前日まで既存堤防の近くまで来て頭上を舞っていた7千羽余りのシギ・チドリは、潮の干満がなくなったためその日を境に数キロメートル先にしか見られなくなった。個体数は4週間を過ぎた頃より急激に減り、6月1日にはホウロクシギ等の大型シギ49羽のみとなった。有明海の他の干潟に移ったのかどうかは渡り時期であるため正確には分からぬ。

しかし過去の調査によると、シギ・チドリの餌である底生生物は種類、量とも諫早湾が他の干潟より格段に多かったことを考えると、仮に移ったとしても、そこで十分な量の餌が採れるかが心配である。

干潟は締め切り後度々降る雨にもかかわらず、日増しに乾燥し、ひび割れ、種類数、密度ともに世界でも指折りと言われている300種以上の底生生物は姿を消しつつあり、二枚貝は多くが死んで、異臭を放っている。カニ、トビハゼ、ムツゴロウは穴の奥深く潜っているものもいるが、かなりの数が潮止めの犠牲になったと思われる。1メートル掘っても無臭だった潟土は、今では40センチメートルも掘ればヘドロに変っている。以前の姿を知っている私たちには涙が出るような光景だ。残存した水面では急激な悪化により、プランクトンの異常発生が見られはじめた。

## ●各地からの反響

締め切り後の反響の大きさには驚いた。あのショッキングな映像が、日本中の人々にこの事業を知らせるチャンスになったのは皮肉である。おそらくほとんどの人はあの時初め

て諫早湾を知ったと思う。締め切り直後に結成された「諫早湾干潟緊急救済本部」には、電話、ファックスでの問い合わせが絶えない。「今、干潟はどうなっていますか」「私にもできることはありますか」「手伝いに行きたいのですが」等など。県外からのものが大半であった。

4月27日に行った「干潟の生き物救出作戦」には300名もの人々が集まった。遠く東京からも、今まで干潟に関心がなかったような若者が来ていた。事務局を手伝うボランティアの若者も遠方より来てくれている。若い人の間違ったことに対する怒り、行動力はすばらしいと思う。

その反面地元では、殆どの人が疑問を感じているのに、実際に行動を起こす人は意外に少ない。国が決めたことだから仕方がないと思う県民性によるものなのか分からぬ。

もう一つ不思議に思うことは、日本野鳥の会会員からの反応が余りないことである。鳥帽子岳へは、毎秋アカハラダカの渡りを見に県外から数百人の人が訪れるが、諫早湾についてはどう思っているのだろう。「反対ではあるけれど・・・」なのだろうか。「野鳥の会は鳥さえ見られればいいんだろう。」と思われるようで悔しい。「ムツゴロウを助けて！」が大きく取り上げられているが、そんな感情論で見直しを求めているのではない。もっと根本的なことを問題にしているのである。諫早湾の持つ価値を多くの人が知らないままに、目的がはっきりしない事業のために干潟をなくすのはどう考えても許されない。

### ●これから

現在、諫早湾の問題は政治問題へ発展している。締め切り時の私には予想もできなかつた展開である。政治に利用されていると言う意見もあるが、どのような理由であっても干潟が元に戻るのであれば大歓迎だ。黙っていては何も変わらない。一人でも多くの人ができる範囲で支援して欲しい。百聞は一見にしかず、まずは見に来てこの矛盾だらけの事業の愚かさを自分の肌で感じて欲しい。また、本支部よりお願いした署名に早速取り組んでいただき、感謝に絶えない。これからも継続してお願いしたい。

この秋、戻ってきたズグロカモメがヤマトオサガニを探れるような干潟を残したい。

(やまぐち・まさお／長崎県支部会員)

## ● <活動>

干拓をめぐる7つの疑問 (No.602 1997年7月号 P. 38-39)

「諫早湾干潟は、(ラムサール条約の定める登録湿地の) クライテリアに該当するのは間違いないです」環境庁自然保護局計画課の鹿野課長は、居並ぶ国会議員と記者の前でこう明言した。6月11日、「諫早湾を考える議員の会」のシンポジウムでのことである。

環境庁も国際的に重要な湿地と認める日本最大の干潟を、なぜ保全できないのだろう。国民的な議論のただ中にある「国営諫早湾干拓事業」の問題点を整理してみたい。

### ○諫早湾の自然

諫早湾と言えば、ツクシガモやズグロカモメといった稀な冬鳥を思い出す方も多いだろう。春・秋のシギ・チドリは、全国で1、2の渡来数を誇る。こうした干潟の鳥を中心に、長崎県内に生息する種の6割に当たる232種が記録されている(鴨川 1989)。1978年以降の15年で全国の干潟消失面積の1/3に相当する1400ヘクタールを失った有明海の中で、諫早湾はかつての姿を保ち続けてきた。

長崎県支部の調査によれば、諫早に渡来するシギ・チドリ類は最大時1万3千羽以上。渡来数が減っている大型シギ類が多いのも特徴で、ピーク時ダイシャクシギで300羽、ホウロクシギで200羽、チュウシャクシギ900羽、オオソリハシシギ600羽を越える。

希少な種も多く、環境庁の「絶滅のおそれのある野生生物」(レッドデータブック)記載種のうち、鳥類25種、魚類はムツゴロウ等6種、甲殻類2種、植物1種が記録され、ゴカイ等の新種が次々発見されている。

ズグロカモメは全世界で約3千羽と推定されている希少種だが(BirdLife International 1994)、その10%にものぼる個体が諫早湾で越冬する。昨冬の長崎県支部のカウントでは316羽を数えた。

ニュージーランド、オーストラリア、東南アジアから中国、ロシア、アラスカに至る東アジアの渡りルートの中で、諫早湾は国際的に重要な位置を占めているのである。

### ○どこがおかしいのか

この干拓事業は、長い曲折を経て進められている(表1)。事業目的はたびたび変更されているが、湾を締め切り、内部堤防を築いて農地を造成する、という基本線はなぜか変わっていない。

表1 謫早湾干拓事業の変遷

- 1952年 長崎県、「長崎大干拓構想」発表。主目的は米増産  
(1957年 諫早大水害)
- 1964年 事業着工予算がつく
- 1965年 漁民による「長崎干拓絶対反対実行委員会」結成  
(1969年 減反政策開始)
- 1970年 長崎干拓事業、中止される  
「長崎南部地域総合開発計画」(南総計画)に変更になる  
主目的：酪農・園芸農地、水資源開発、工業用地
- 1973年 「諫早の自然を守る会」結成 漁業交渉、不調により中断
- 1975年 諫早湾淡水湖水質問題委員会答申
- 1976年 漁業交渉、おおむねまとまる
- 1977年 周辺県漁協、反対姿勢を鮮明化。淡水化による水質論議起きる。
- 1979年 南総計画環境アセスメント縦覧
- 1981年 事業縮小案が提示される
- 1982年 南総計画中断。農水相、高潮・洪水対策の防災事業を打ち出す
- 1983年 農水省、諫早湾防災対策検討委員会設置。漁業者との同意のため、  
締め切り面積を 3900 ヘクタールに縮小する案が提案される。  
同委中間報告書は右も含め三つの縮小案を検討、3300 ヘクタール案について、  
「国土保全上からも問題が多いと言えよう」と明記。
- 1984年 3680 ヘクタール案が提案される
- 1985年 3550 ヘクタール案が提案される  
「国営諫早湾干拓事業計画」発表 主目的：防災・多目的農地造成
- 1986年 湾内 12 漁協、漁業権を放棄。環境アセスメント縦覧。  
長崎県支部から意見書を提出
- 1989年 「国営諫早湾干拓事業」起工式  
国際水禽湿地調査局の「日本湿地目録」に有明海が収録され、  
諫早湾が特記される
- 1991年 二枚貝タイラギの大量死。堤防工事との因果関係解明を求める公開質問状  
提出 (長崎県支部他)
- 1992年 本会、国内重要湿地のひとつとして、環境庁に諫早湾の保護区化と  
ラムサール条約登録を要望
- 1993年 ラムサール条約釧路会議開催。'93 ウエットランド会議 (本会ほか) から、  
諫早湾のラムサール条約登録を要望
- 1996年 工事中止と事業見直しを求める署名を提出 (長崎県支部他)。  
諫早湾自然の権利訴訟提訴。  
総務庁より事業見直しの勧告が出される

環境アセスメントは行われているものの、極めておざなりなものであり、例えば鳥への影響については次のように結ばれている。

「以上のように諫早湾湾奥部の干潟消滅は、シギ・チドリ類の生息環境に影響を与えることは避けられないが、（中略）諫早湾の残存海域や有明海の残存干潟に移動することが期待されるなど、鳥類には著しい影響を与えることはないものと考えられる。」（九州農政局 1986）

ここでは、どこの干潟に移動するのか、そこでの餌量は十分か、渡りの成功率への影響はどれほどか、といった推定は含まれていない。これでは長期的に見て、諫早湾に渡ってきていた鳥の数にどういう影響があるのか、といった予測はできないはずだ。

諫早湾干拓事業には、他にも次のような疑問が提出されている。

- ・防災にほんとうに役に立つか。堤防締め切りは高潮と洪水を防ぐどころか、安全性を疑う報告書（1988年）農水省自身によって出されている。農地の冠水被害は現在の堤防の補修や河口部の浚渫、排水ポンプの増設で対応可能なのに、それが行われていない。
- ・潮受け堤防は地震で倒壊し、津波を起こす恐れがある。加えて島原半島東部は地震の空白地帯で、大地震が発生する危険性がある。
- ・長崎県内には放棄農地が5000ヘクタールもあるのに、干拓によって生まれる農地は1500ヘクタール。しかも具体的な営農計画も確定していない農地が必要なのか。
- ・事業費は計画当初（1350億円）から膨大に膨らんでいる（2350億円）。しかもその中身は公開されていない。
- ・淡水化による水質悪化解消のめどが立っていない。下水道普及率は現在わずか17%。汚染が進む水は湾外に放出せざるを得ず、健康被害、漁業被害が心配されている。
- ・有明海～東シナ海全体の稚魚の成育地の消失により、広域的な漁獲減が予想される。

このような疑問に対して、今のところ納得のいくデータや回答は出されていない。

### ○引き返す勇気を

新聞社の世論調査によれば、「排水門をあけるべき」という意見は5割を超えており、それに対し「あけるべきでない」という意見は2割。これが、事業費の7割を負担することになる納税者の意見である。

諫早湾干拓事業を通過させた環境アセスメントは過去のものになった。計画段階での検討、広い範囲からの意見聴取、立案後長期経過した事業の再アセス実施といった項目を含むアセス法が成立したのである。オランダ、イタリア、アメリカでは、一度干拓した土地を湿地に戻す事業が進んでいる。「何を今さら」という声はあるが、「今」をとらえ未来を

考えて立ち止まる勇気が必要と思う。

確かに一度着工してしまった事業ではある。しかし、かつて一度も国民の前で議論されてこなかった問題を、このまま見過ごしてよいものか。諫早湾干潟を取り戻せるかどうかは、私たちひとりひとりにかかっている。

(こみなみ・ゆきひろ/保護調査センター副所長)

=====

干潟に再び潮を入れるために諫早干潟緊急救済本部  
「諫早湾干潟を救うための7つのアクション」より

1. あなたの気持ちを抗議のFAX・葉書に！

抗議文は「諫早干潟緊急救済本部」で集計します。

ぜひ発信の際には、写しをお送りください。

写しの送信先：諫早干潟緊急救済本部

FAX番号 0957-23-3740

(抗議のあて先は6月号p. 17をごらんください)

2. あなたの地域選出の国会議員に開門を求める手紙を送ってください

3. 黄色いハンカチにメッセージを託して送ってください

諫早の締め切り堤防の中にある小さな島に、干潟の清掃を続けている原田さんが全国から寄せられた抗議メッセージつきの黄色いハンカチを掲げています。

送付先 〒854-03 長崎県南高来郡愛野町甲 3847-1 原田敬一郎様

4. 講早干潟緊急救済本部の活動にカンパを

振込先 郵便振替口座 01710-1-62594

口座名義 講早干潟緊急救済本部

5. 署名を集めてください

用紙の請求と送り先は下記まで。

(用紙は各支部にもお送りしております。〆切は6月30日です)

6. 講早干潟緊急救済本部の応援団体をさがしてください

あなたが所属の市民団体によりかけてください。

7. このプランをあなたのご家族やお友達、お知り合いに広めてください！

お問い合わせ先：

日本野鳥の会保護・調査センター

TEL03-3463-8997～

諫早干潟緊急救濟東京事務所

TEL03-3238-1951

FAX03-3238-1952

諫早干潟緊急救援本部

TEL& FAX0957-23-3740

## ●<緊急レポート>

### 諫早湾干潟を救え (No.601 1997年6月号 P.17)

4月14日、水しぶきを上げて次々と落ちていく鉄板によって、諫早湾口を仕切る全長7キロに及ぶ潮受け堤防が締め切られた。国内最大の干潟を消滅させる干拓工事の現場を保護・調査センターと共に訪れた。

#### 生き物たちの気配がしない！

諫早湾干潟は面積およそ3千ヘクタール（東京ドーム650個分）と、国内に残る干潟としては最も広い。また有明海の中でも最も自然の姿を留めており、渡り鳥たちの絶好の中継地になっている。バードウォッチャーの間ではツクシガモの来る干潟として古くから知られていた。

諫早湾周辺で確認されている鳥類は232種（鴨川誠 1989）に及び、中には環境庁のレッドデータブックで危急種に指定されているカラフトアオアシギ、ヘラシギなどが含まれる。全世界で約2千羽しかいないと言われるズグロカモメも、総個体数の約14パーセントがここで越冬している（竹上修 1995）。

締め切りから2週間近くたった4月26日、潟土（がた）は無惨にひび割れ、元は泥に胸までつかったという場所も人が歩けるほどに乾いている。

足下に生き物の姿は見えない。ムツゴロウやシオマネキなどの魚介類が数多く生息しているというが、干潟は不気味に静まり返り、表面に無数に開いた穴にその痕跡を見るのみだ。彼らは数メートルにも堆積した潟土の奥に水分を求めて潜ったまだという。

案内してくださった長崎県支部の方が、毎年1万羽以上やってくるシギ、チドリたちの話をしてくれた。

「ついこの間までは、頭のすぐ上を何千羽っていうシギたちが飛びよったもんよ」。

ザツ、ザツと翻りながら群れ飛ぶ姿も今は見られない。ふつうなら鳥たちは、潮が満ちてくるにつれて岸に近づいてくる。しかし、湾が締め切られた今、鳥たちは湾内に残った遠い水際にとどまつたまだ。

#### 諫早湾干拓事業の問題点

この諫早湾干拓事業は1953年に最初に計画された。以来、食料増産、利水、治水と、次々に目的と事業名を変えながら、湾を締め切って干拓するという計画自体は見直されることなく進められてきた。長良川河口堰や千歳川放水路など、今問題となっている大規模公共事業と同じ構図がここにもある。

農林水産省がこの事業を進める大きな目的に「水害対策」が掲げられている。しかし、

同省の委託を受けた諫早湾防災対策検討委員会が 1983 年にまとめた『中間報告書』には、「国土保全上からも問題が多いといえよう」と明示されていることが最近明らかになった。また締め切り後に堤防内に残る淡水池について、環境庁から水質悪化の危険性が指摘されている。これは干潟の浄化機能が失われるためだ。しかし流域の下水道整備は遅く、これから着手される地区が大部分だ。

4月 14 日の潮受け堤防の締め切りは、このような状況下で行われた。その後締め切った内側の水面の水位をさらに下げる排水が数度にわたって行われ、干上がる面積はさらに増えている。このままでは国会、県議会で議論が進行しているさなかに、堤防内部に残った水は腐り、干潟も死滅する。有明海の多様な水産資源のゆりかごも失われることになる。後に残るのは「私たちの税金で支払われる莫大な負債」を抱えた 2 千ヘクタール余りの農地だ。しかし、この干拓地の利用計画は未定だ。

### 今、必要なこと

改めて強調したいのは、地元の諸グループも本会も干拓自体に反対しているのではないということだ。時代にあわせて工事を見直し、世界的に貴重な干潟をムダにするのではなく、もっと有効に利用しようと提案しているのである。すでにそのための代替案もある。今必要なのは、結論を急ぐあまり干潟を死滅させないことだ。

そのためには、まず潮受け堤坊の両端に設けられた水門を開けて干潟に潮を入れる必要がある。干潟が死ぬ前ならば、その機能の 8 割は回復すると言われている。

5月 15 日には各政党が総理大臣あてに工事見直しの提言をする予定だ。私たちもできることから始めよう。

(まとめ 編集局・鈴木 寛)

諫早湾の問題については、長崎県支部が長年にわたって取り組んで来ました。また、締め切り後に地元の自然保護団体を中心に立ち上がった「諫早干潟緊急救済本部」の活動を本会も全面的に支援しています。5月 7 日、8 日には本会理事・保護調査委員会委員長の岩垂寿喜男前環境庁長官もWWF 一 ジャパン、N A C S - J の代表と共に現地を訪れ、干拓事業に疑問を投げかける見解を表しました。

### ■ 私たちに今できること ■ ■ ■ ■ ■ ■

潮通しのため排水門を開けて欲しいという抗議のメッセージをハガキか F A X で送る。

●送り先

橋本龍太郎総理大臣

〒100 東京都千代田区永田町2・3・1

FAX: 03-3581-3883

藤本孝雄農林水産大臣

〒100 東京都千代田区霞ヶ関1・2・1

FAX: 03-3501-5126

高田勇長崎県知事

〒850 長崎県長崎市江戸町2・1・3

FAX: 0958-28-7665

吉次邦夫諫早市長

〒854 長崎県諫早市東小路町7・1

FAX: 0957-27-0111

活動を支援する募金を送る。

●募金の宛先

郵便振替口座 01710-62594

諫早干潟緊急救済本部

諫早干潟緊急救済本部

854 諫早市小野町1100-13

山下弘文方

TEL: 0957-23-3740